

## 未来から逆算して現在を考えよう 経営者と関連産業の共同を

自民党がTPPの大筋合意を踏まえた国内の農業対策を決定した。

コメに関しては、新規に拡大される輸入枠7万8400tへの対策として、増加分に相当する国産のコメを政府が備蓄用として買い入れて主食用のコメの価格が下落するのを防ぐとしている。

牛肉と豚肉の生産者に対する支援策として従来からある、生産者の平均的収入が生産コストを下回って全体で赤字経営になった場合に、その赤字分の8割までを国と農家でつくる積立金から補填する制度を法制化して恒久的な措置にする。補填の割合も9割に引き上げるとしている。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な生長を見せている。江刺の稲の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

それに加えて豚肉では、これまで50%だった生産者負担分を牛肉と同じ25%に軽減するとしている。

次の参院選を控えてTPPに強く反対してきた農業団体、農業関係者をなだめるには、十分な対応なのだろう。ただし、保護にかかると一般財源の負担増加は避けられない。

筆者の感想は、現在を守るために未来をつぶすのである。TPPの影響

響はある。それゆえに国内対策が取られるのは当然であろうが、保護すべきものとしての現在がいかなるものかをさらに検証すべきだ。とりわけコメ分野において。

そもそも、現在のコメ生産者にとって経営課題とは、外圧による供給過剰ではない。国内生産者、それも趣味的にコメ作りをする高齢小規模農家による生産が供給過剰を生んでいるのである。しかし、それも高齢化の進行によって今後急激に減っていくはずだ。事業的農家なら、政策的介入がなくとも生産者自身がマーケットの送るシグナルを判断して生産の在り方を変えていく姿になるべきである。

それにもかかわらず、「国産米を政府が備蓄用として買い入れてコメの価格が下落するのを防ぐ」というのでは、やめようと思っていた趣味的な高齢農家にまで安心してコメ作りを続けてくださいと言っているようなものである。

だから、水稲生産を含めて畑作技術体系を導入する水田農業イノベーションや、コメに代わって大きなマーケット開発が期待できる水田での

子実トウモロコシ生産を叫ぶわけだ。政策によるのではなく、経営者自身と、それに呼応する関連産業の共同の取り組みで自ら農業を変えていこうと。そのほうがいまよりはるかに財政負担が少なくなる。

各地の子実トウモロコシ生産は大幅な面積拡大はないが、確実に社会的認識を得てきている。需要はあるものの、乾燥貯蔵設備の不備が拡大を阻んでいることが自覚されてきたこと自体、大きな進展なのである。

でも、この水田農業イノベーションやトウモロコシ生産にかかわる皆さんを含めて、まだ過去の経験や認識のなかで現在を考えてはいないだろうか。乾燥貯蔵設備の新設が従来と同じように農業の内部だけでうまくいくのか。これから規模拡大が進むなかで、従来どおり自己完結の機械所有で生産コスト削減は図れるのか。EU諸国と同様、我が国の農業でも、これまでの兼業農家を対象とした作業請負ではなく、プロの事業者を対象とするコントラクターの成立がぜひとも必要なのである。トウモロコシに対応するコンバインを普及させるためにも必要なのである。

未来から逆算して現在を考えよう。北海道の長沼・岩見沢地域のようにな面積拡大が進んでいるのは先進地域である。